

News Letter



ヒサカキの葉裏にしっかりつかまるウラギンシジミ。
その爪跡が葉に残る程である。

ウラギンシジミという小さな蝶がいる。実物を最初に見たのは高校生の時。場所は母の実家、岡山でのことだ。比較的暖地に多く、東京近郊ではあまり見た記憶がなかった。

私のメインフィールドは多摩丘陵である。通い始めて16年、最も多い年は、年間51回も足を運んだ。この間に約1000種の昆虫、800種の植物、100種の鳥、その他とりあわせて200種ほどの生き物の記録がとれた。写真に納められたものだけでも500種に上る。写真を整理すると、この中で最もたくさん撮られていたのがウラギンシジミなのだ。

きっかけは、知り合いに、ウラギンシジミの越冬を知らされたこと。シラカシの葉裏にとまる、白い蝶を見ながら、このままじっと一冬を過ごすかと教えられた。雪や寒風の中をただひたすら耐える姿を想像し、何とも感慨深い思いに襲われた。

翌年から、ウラギンの越冬調査を始めた。普通、年2回発生し、成虫で越冬する。越冬に利用される場所は、山の南西向きのはげが最も多い。越冬個体は夏過ぎに発生し、翅先が鋭く尖るのが特長だ。ほどよく隙間のある常緑樹の葉裏で、葉の中心からはずれた位置に、頭を下に向けてとまる。翅は閉じられ、触角はその間に挟み込む。翅の裏は、余りにも白く、ウラギンシジミの名に恥じない。

こんなに白くは目立ち過ぎるように思うが、陽を受けた照葉樹の中では不思議と目立たず、なかなか見つけられない。

11、12月の調査は実に楽しい。「ここにもいたか」と新しい個体をどんどん見つけられる。しかし年が明けるところから様相は一変する。調査は暗く辛いものとなる。

「先週までいたのに...。」

ウラギンの姿が見当たらない。

「だめだったのだろうか。」

信じたくない思いで樹の下を捜す。そこに、後味の悪い現実を見ることがしばしばある...

残念ながら越冬成功率はあまり高くはない。ここ数年の調査で、多い年でも60頭

常磐木の葉裏で...

常磐木の葉裏で...



雨に打たれたウラギンシジミ。濡れたその羽が少しやぶれている。

中7頭。少ない年には、32頭中1頭しか越冬を成功させていない。

ある年、最後まで頑張り冬を乗り切った個体を、ヒサカキの葉裏に見た。寒さに耐え、乾燥に耐えたその個体は、春の暖かい雨に打たれ、翅にしずくを光らせていた。「これが最後の試練なのだ」と思いながらしみじみ眺めたものだ。

1週間後には、ヒサカキが開花した。春の訪れと、越冬の成功を祝福しているかのようであった。次に訪れた時、すでにウラギンの姿は無かった。しかし、今回は木の下を捜そうとは思わない。

春の日差しが、とてもまぶしい午後だった。

(代表取締役会長・仁井雄治)



ヒサカキの花が咲いた。春がきたのだ。